



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	土屋 博著「牧会書簡 テモテへの第一の手紙, テモテへの第二の手紙, テストへの手紙」(日本基督教団出版局, 1990年)
Author(s)	田中, 勇二
Citation	基督教学, 26, 51-58
Issue Date	1991-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46498
Type	other
File Information	26_51-58.pdf



土屋博著『牧会書簡 テモテへの第一の手紙、テモテへの第二の手紙、テトスへの手紙』（日本基督教団出版局、一九九〇年）

田 中 勇 二

（序）

関根正雄氏の著作集第一九巻の月報の中に「小田島太郎氏へのお答え」という一文があり、そこに次のようなお言葉がある。「論文や著書を評価する場合、新しく提示された方法や説を紹介し、それについて論評するのはなく、自分に都合のよいトピックを勝手に取り出し、それに関連して自分の知識をひけらかすのでは、少しも客観的な書評にはならない。書評というものはこそ、書評者の人柄や学問に対する態度をそのまま露呈するものと言えらる」。また一九九一年三月一九日付けの朝日新聞の社説には、「書評は文化成熟の指標だ」という文章が掲

げられ、「書評というものは英国的な意味ではこの国に存在しない。批評になっていない」という加藤周一氏の御意見や、丸谷才一氏の「日本の書評は……灰色で鈍重で記憶に残らない」という苦言が紹介されている。

学術書と文学作品とは性格が異なる故に、書評の仕方も自ずから相違するとも一応可能ではあるので、この三名の先生方のお考えを列挙し、書評は難しいという一般的判断を導き出すのは、ある意味では正鵠を射ていないかもしれない。しかしその昔、石川淳氏が朝日新聞の夕刊において披瀝された文芸時評の散文では、平野謙流の批評とは趣が異なり、学術書と文学作品の区別が立てられずに、石川氏が読んで興味深く思われた書物が和漢洋の豊かな教養・学識に基づき批評の対象とされた。その芸たるや余人の追隨を許さぬ態のものであったと思われる。それ故に、如何なるジャンルであれ日本において本を批評するという行為は困難である、という一般論が得られよう。

筆者は牧会書簡の研究を集中して行なった経験がないので、土屋博氏の著書を書評するには、二重の意味において困難を覚える。とはいえ、本注解書を読み、感動を覚え、牧会書簡が興味深い文書であることが判明した。

すなわち、本注解書は注解書としての機能を立派に果たしているという判断を得ることができたのである。

本は人間と同じように平等である、と考えられる。如何なるジャンルの本であれ、読者に感動を与えることができる、それは「読める本」(吉田健一、『書架記』参照)なのであり、繰り返し読むことができる。また本を読み感動を覚えれば、その感動のよってきたる所以を明らかにし、本の与える感動の近似値を表現できれば批評は成り立つはずである。このような考えをもって、本注解書が与える感動喚起の構造を詳らかにし、書評者としての勤めを果たしたと思う。手順としてはまず第一に、「翻譯」について考え、続いて「本文批評」に触れる。最後に「釈義」と「緒論」について論じることになる。

(一) 翻譯

あるロシア文学の研究者がかつて筆者に、ドストエフスキーの作品の翻譯は、米川正夫訳が出版された後では米川訳の和文和訳にしか過ぎない、という意見を述べられたことがある。その命題の真偽について判定する能力はないが、バックハウスによるベートーヴェンのピアノ・

ソナタの演奏が長くスタンダードな位置を占める、という吉田秀和氏の御意見と同じ程度には真なるものである。聖書の日本語訳の場合には、一六一年に出版された欽定訳聖書のようにスタンダードなものがあるであろうか。一九八七年に出版された新共同訳聖書が一般にはそのようにみなされているわけであり、ある程度スタンダードな役割を演じることができると思われるが、日本語という言葉それ自体が発展途上の性格を持っているが故に、「スタンダードな」という形容詞を冠せられる日本語訳聖書は未だ存在しない、という認識が健全であると思われる。それ故に、共同でなされる翻譯であれ、個人訳であれ、種々の翻譯が出版されることには大きな意義がある。

土屋氏の翻譯には誤訳がない。このこと自体は、古典である聖書の翻譯である限り当然であるかもしれない。何故なら、一般に聖書翻譯を出版する程の学者は、先行する複数の翻譯を必ず参照するはずだからである。特定の訳を参照し過ぎると、「日本聖書協会一九五四年改訳と新共同訳との相違は、RSVとNEB、REBとの相違に対応する。日本語訳聖書は今なお英語訳聖書の影響化にある」(本注解書二二七頁。テトス三・七の訳につ

いての議論に付加された注の言葉」という類の批判を受けることになる。歴史をふり返ると、例えば姦淫聖書のような例もあるが、これとて印刷ミスであり、総じて聖書翻譯にはかつての小林秀雄氏のボードレールやランボアの詩の翻譯におけるような誤訳はないものである。

土屋氏の翻譯に誤訳がないとしても、当然のことながら他の牧会書簡の訳と比べると、解釈が異なる故に訳文が相違する場合がある。例えば一テモテ四章に話を限って言えば、五箇所において新共同訳と異なる（一、三、四、五、七の各節）。それぞれに根拠が明示されているので、異論のある者は対論することによって独自の訳をすることが出来る。筆者には、土屋氏の解釈が説得力のあるものと思える。ある箇所の自説に基づく訳が正しいとすると、他の訳は誤りであり、あれもこれも正しいかもしれないなどと應揚な口を利くのは学問にあるまじき行為である、という主張も時折見かけられるが、自説とて学問の深化発展に伴い変更される場合もあり得るので、他説に基づく訳を性急に誤りであると断定しない土屋氏の姿勢は筆者には好ましく思われる。

土屋氏の翻譯は、牧会書簡の段落毎の釈義の前に分割された形で記されている。これは本注解書の基であった

『聖書と教会』誌上に連載された姿をそのまま踏襲したものであり、このこと自体に何も問題はない。しかし、本となった場合には、各段落毎とは別に訳文を一括して掲載して頂けると、通読する際に読者には便利であろう。紙幅がないという可能性も考えられるが、その便利さ故に定価に幾許かの変動があるにしても筆者には苦にはならない。

土屋氏の翻譯文体は極めて格調があり、かつ理解しやすいものである。現代の若者が読んでも何ら抵抗を覚えることはないであろう。筆者には、です・ます調よりは文語と口語の混淆文の文体が好みにあい、個々の訳には修正すべき箇所があるとしても、全体としては一九五四年改訳の日本聖書協会訳の文体が良いように思われる。しかし、これは個人的な趣味の問題であり、時代の流れに基づく一般的な文体趣味の変遷があるので、多くの現代の読者を考慮に入れれば、土屋氏や新共同訳の翻譯文体が現代日本語としてはふさわしいであろう。筆者は、ネストレ・アーラント版新約聖書の第二六版の大型版に大きな余白の頁があるので、そこに基準となると自分が信ずる訳を記すことにしている。勉強が進むにつれ、その訳を修正していくわけであるが、牧会書簡には土屋氏

の翻譯を土台にしたく思う。

(11) 本文批評

某国立大学の英文学の研究者の方と話をしている時に聖書が話題となり、その先生は欽定訳聖書を読むことが多いと言われ、その英語の特徴について語られた。言われることはもっともであるが、少なくとも新約聖書の場合、底本となっている公認本文が依拠するギリシア語写本の質が劣るので、欽定訳の英語鑑賞ではなく聖書を読むのが目的であれば、現代の英語聖書、例えばNEB(當時はまだREBやNRSVが出版されていなかった)をお用いになる方が良いのではないかと筆者は提案した。後に再び同じような話をした時にも、欽定訳ではyouが主格の場合にはthouになったり、目的格の場合にはtheeになったりする程度で現代訳と大差がない、と主張された。何文学であれ文学を研究するはずの者には、本文批評学を含む文献的理解が前提とされねばならないはずであるが、この常識が一般には理解されていないという印象を得た。

新約聖書をギリシア語で読む習慣があっても、本文批評学に対して関心を持つ人は数少ない。釈義学の勉強を

する際にも本文批評については、メッツガーが表わした本文についての注解書の意見に大きく依存することが多いと思われる。この書物は聖書翻譯者にはある程度有益であるが、本文批評学的観点からは批判の余地が多分にあり、本文について問題があると思えば、自分の頭でよく考察し、古典的なツァーンの注解書などを参照する方がはるかに生産的である。

日本の新約聖書本文批評学の世界の中では、塚本虎二氏の『福音書異同一覧』や蛭沼寿雄氏の一連の業績が先駆的なものと思われる。しかし、写本を教会史の中に位置づける努力、個々の写本の調査研究に基づく写字生思想研究、現代釈義学の知識を踏まえた上での本文批評学的考察等、未開拓な領域が多々あり、これらの研究は本文批評学の学説史研究と並んで遂行されねばならないであろう。Neomassoretでも命名し得る研究者たちの出現が待たれる。

以上のような研究環境の中で、土屋氏が本書において本文批評について多くの頁を割かれたのは卓見であると思われる。読者は土屋氏の考察に導かれ異読に注意を払いつつギリシア語本文を読んでいくと、写字生の無意識の誤りや、意図的修正の努力が判り、テキストの問題点

が了解でき、理解を深めることができるであらう。

例えば、I テモテ三・一六において引用文があり、その最初の言葉は土屋氏の訳ではキリストとなっている。原文には *ἡρώδης* ないし *ἡρώδης* という単語はなく、*ῥο* という男性の関係代名詞主格の読みが採用されているわけである。この関係代名詞の先行詞は、コンテキストからキリストであることが判る。しかし、先行詞が明示されている方が望ましいと考える写字生は、前節の *ἡρώδης* を先行詞と考え、*ῥο* を中性の関係代名詞主格の *ο* に修正する。このように修正すると文法上はより明示的になるが、引用文の内容には合致しない。文法的にも内容的にもテキストを滑らかにしようとして、関係代名詞を削除し、*ο* ないし *ο* *ῥο* と書き換えてしまう写字生もいる。最終的には “*lectio difficilior potior*” という原則が適用され、*ο* が元来の読みであったと判定し得る故に、キリストという訳語を与える土屋氏の訳語は正しいことになる。「ちなみに、“*lectio brevior potior*” という原則に関しては、初期のパピルスには適用できないという研究があり、原則の適用の際には慎重でなければならぬ」。以上のように異読調査をしつつテキストを読んでいくと、単にギリシア語本文の和訳だけをする

よりは、はるかに内容理解が深まることになる。

もっとも、本書からは本文批評学的考察の明示的方法論を学ぶことはできない。これは本書が、本文批評に多くの頁を割いているにしても、本文批評学の入門書ではない故に極めて当然である。読者は然るべき入門書を読み（現時点では、Kurt Aland, Barbara Aland: *Der Text des Neuen Testaments* が最も良い。英訳もある）、方法論を学び、土屋氏の本文批評学的判定と対論すれば、結論が同じになるにせよ有益な発見をすることになるであらう。

(三) 釈義・緒論

中国には「馬には乗ってみよう。酒には酔ってみよう。小説には騙されてみよう」という意味の古言があるそうである。やはり本は夢中になって読むのが一番である。あるいは、夢中になって読める本が、自分にとっての「本」なのであらう。聖書は、教会の書でもあり、また万人に開かれた古典でもあるという性格を有する。その聖書を夢中になって読むことができるであらうか。ある程度は可能であらうが、内容を理解しようという考えがチラチラすると、人は無意識の内であれ、意識的であ

れ、方法論を模索することになる。

どの読み方が一番聖書にふさわしいか、ということについては古来より現在に至るまでの間に種々の議論がある。近代合理主義精神に依拠して、原著者の意図を問うという作業を課す歴史的・批判的研究に基づく読み方が有力なものであることは疑い得ない。とはいえ、この方法による研究は精力的になされているが故にとかく批判の対象とされることもあり、土屋氏も常に警鐘を鳴らしておられることは周知の事実である。しかし、氏自身も釈義を進めるにあたっては歴史的・批判的研究の方法を使用される。テキストをして人間に理解可能な形で語らしめるためには、どの学者によってもそれが強力な武器となるからであろう。もっとも土屋氏の場合には、歴史的・批判的研究の方法を宗教学的解釈の部分集合であるとして理解し、牧会書簡の釈義を行なうという意味の主張をされる。この方法論的宣言がどの程度まで具体化され、単に（といっても現実には多様な存在様態があるわけであるが）歴史的・批判的研究をする者の方法論と質的に異なるのかは浅学非才の筆者には未だ了解し難い。これは批判ではなく、疑問である。例えば「テモテ三・一——六の注解の最後の所で、宗教運動の最初期の自由が教団

の形式化が進展するにつれ形骸化していく様が叙述されている。これはこの箇所の釈義の結果に基づくまとめであり、かつ宗教学的解釈であろう。しかしこの解釈は、翻訳に始まり本文批評を経て個々の文言の釈義に至るまでの部分に方法論上の影響を及ぼしているのであるうか。

牧会書簡の原著者は、パウロという名前を掲げる。しかし、実際にパウロが我々の三通の書簡を著わしたと考える学者は今日極めて少ない。また、手紙の受取人の「テモテ、テトス」ですら偽名である可能性が大である。この種のいわゆる緒論的諸問題が up-to-date な問題意識の下に本書の冒頭部で論ぜられており、読者は牧会書簡についてのまとまった知識を得ることができ、極めて有益である。何種類かの緒論の講読に基づく緒論と、厳密な釈義的検討を経た上で記された緒論との間には、筆の勢いに歴然とした差があり、土屋氏の緒論は生きている。

釈義学的考察に基づく本書の緒論の中で筆者の興味を強く引くのは、原著者の執筆意図とでも言うべき「思想的特徴」という項目である。牧会書簡の原著者は、教会の発展を安定路線に置かなければならない時代に属している。それ故、異端と対決する必要に迫られる。その際、原著者は自らの思想を積極的に開陳することはなく、バ

ウロ神学を受け継ぎ、状況に応じて他の人々の思想を借用する。一口に、無思想の思想である。ユダヤ的傾向を持つグノーシス主義者である論敵に対しても思想の矛盾をつくというような高級な姿勢は取らず、若干の批判をした上で、事実であるか否かはともかく相手の道德的欠陥（と思えるところ）を批判する。選挙運動において対立候補を追いつき落とす作戦に類似している。教会構成員に対しては、教会指導者たちを模範するようにと勧め、順応主義を奨励し、終末論の後退に基づく小市民道德の励行を促す。教会書簡の原著者の思想に同意し、信仰生活を送ると確かに教会は形成されるであろう。強力な無思想の思想ではある。

ここで筆者が疑問とするところは、教会書簡の原著者の精神には如何なる構造があるか、という点である。教会形成を促進しているからには、原著者には確かにテキスト通りの物の考え方があり、可能性がある。また、教会を形成することが自らの生活手段であると意識する程度が高ければ高い程、事態は異なる可能性もある。文学的イメージーションを働かせると、無思想の思想は不気味な相すら帯びてくる。しかし、沈黙よりの類推は文献学では御法度である故に、テキストが語らざることについ

ては発言を控えるべきかもしれない。

以上のように、テキストの語るところの釈義的分析によつてはもちろんのこと、読者の想像力に種々の刺激を与えてくれる宗教思想抽出の卓越性においても、本書は模範的な注解書であると思われる。

（四）ま と め

土屋氏の教会書簡の注解書は、人に自信を持って推薦することのできる質を備えた書物である。その理由は以下の如くである。一、適切な現代日本語がある。二、テキスト解釈における本文批評の重要性を訴える啓蒙的機能を有している。三、厳密な釈義があるが、通読することが苦痛にはならない程の量に手際よくまとめられており、各意味段階毎に宗教学的観点からのまとめがあり、読者は中心的問題点を見落とすことがない。またもっと多くの情報が必要とする者は、土屋氏の注に従い、他の文献を参照することが可能である。四、緒論において教会書簡全体を統一的にかつ興味深く把握することができ、二世紀の教会形成論の一つの姿が明確に判る。五、古典の中に埋没せず、現代的視座からの発言が随所であり、知的緊張感を持って読むことができるために、教会

書簡の教会形成論は、一般的組織形成論の雛形ではないか、というような想像力を読者に喚起する。六、誤植が極めて少ない〔一九四頁の注(8)の中の注(7)は注(8)であろう。一九七頁の注(38)の Brox 発言の中の三番目の単語は、牧師ではなく教師ではないであろうか。二一八頁の注(19)の中の一番目の *épanouissa* という単語の無気記号が欠落している〕。

筆者は本書のおかげで、正典性の故からだけではなく、独立した文書としても牧会書簡が興味あるものであることが判った。すなわち、本書は注解書としての機能を有効に果たしており、筆者にとって繰り返し繙くことのできる「読める本」となったのである。

(付 論)

古典文献学の解釈技術を駆使して、つまりは歴史的・批判的研究に基づき可能な限り客観的に新約聖書の語るところに耳を傾ける用意のある人に若干の提案をしたく思う。まず第一に、土岐健治氏の新約聖書のギリシア語の入門書か、あるいは最近出版された水谷智洋氏の古典ギリシア語の入門書で初等文法を学習されると良い。その次にはここが肝心な点であるが、川島重成氏の原典講

読ガラテヤ人への手紙と佐竹明氏の同手紙の注解書を平行的にお読みになるのが良いと思われる。前者によってギリシア語のモルフロジーの理解を深め、シンタックスにおける分析技術が学べる。後者によつては、歴史的・批判的研究法の方法論、原始キリスト教史、パウロの思想のエッセンス等、新約学の重要事項が学習できる。これらの学習の後に土屋氏の本書を学ぶと、キリスト教の共同体形成論理の一特徴が学べて、思想的にも実践的にも有益な示唆を受けることになろう。